

第2回こんな長崎どがんです会（令和5年8月18日）

テーマ：人口減少時代をデジタルで乗り切る！

参加者：8人（県内企業経営者、ITベンダー、DX支援事業者）

主な意見	対応状況
<p>（DXや事業の再構築への取組みにあたっての経営者の役割） このままでは生き残っていけないという危機感があった。 経営者の改革への決意がきっかけとなるが、それでも一歩目を踏み出すハードルは高い。 社員の希望や要望を吸い上げ、まとめる役割があると進み方が違う。 体制を整えない、外部に丸投げ等は、失敗に繋がる。 10年度にどうなりたいか経営者がビジョンを持つことが不可欠。</p>	<p>お聞きした状況やご意見・ご提案を今後の施策検討の参考として、県内中小企業の課題である人手不足解消などを目指した支援策に繋げてまいります。</p> <p>デジタル人材の重要性は、県としても同じ認識を持っており、引き続き県内中小企業におけるデジタル人材育成・確保の支援に取り組んでいきます。</p> <p>県内でデジタル化やDXを推進する仕組みが形成されるよう、県内の状況を熟知した産業支援機関、金融機関やITベンダー等と更なる連携を図ります。</p>
<p>（現状の課題や取組状況） 担当に大きな負荷がかかっていた業務があったが、その担当の負荷を削減するだけでなく、周りも働きやすくなるようなデジタル化に取り組んだ結果、会社全体のメリットに繋がった。 業務効率化は社員が楽になることに加え、顧客の満足度も向上すると思えたことで、一丸となって取り組むモチベーションになった。 デジタル化できていないと若い人は敬遠する。これから人の確保ができなくなる。 社員のリスキリングでIT人材を育成した。結果から見れば、職種や年齢は関係ない。スキルアップしようという社内の雰囲気作りが重要。</p>	
<p>（成果や成功へのポイント） 面倒だが、誰が・何を・どのように・どのくらい時間をかけてやっているか等、デジタル化する前の現状把握や整理が何よりも大事。 ベンダーは社内業務がわからないので、丸投げは失敗の原因。一人はベンダーと話ができる人が必要であり、その一人を確保するのは経営者の責務。 社内にはたくさんのデータがあるはず。データをデジタル化し繋げることで意味が出てきて、DXに繋がっていく。 小さなことから始められるよう、着手しやすい環境づくりが望まれる。</p>	